

髪で美しさを表し、櫛で美しさを装う 中国貴州省施洞鎮苗族「櫛」の社会的意義とその変容

郭睿麒（山口大学）

中国南西部、苗嶺山脈が広がる一帯は、長江水系と珠江水系の分水嶺となる。本発表で調査地とする施洞鎮は台江県北部に位置し、苗嶺分水嶺北の清水江中部の南沿岸地域にある。調査地となる場所は台江県と施秉県の接する地域にあり、川沿いの苗嶺山谷には20あまりの村が点在している。中国の貧困地域援助政策のため、各村では近年、伝統な木造建築のかわりに鉄筋コンクリート造の家屋が相次いで建てられるという状況にある。

「櫛」は、施洞鎮苗族女性が日常生活のなかで頻繁に使う道具である一方、頭髪に挿す典型的な頭飾りでもある。施洞鎮の苗族女性は毎日櫛を使って髪を梳かして「苗ジュジュ」という独特な髪型を作る。苗ジュジュを作るために、何度も髪に茶油を塗りつけて、髪に光沢をもたせ、2種類以上の櫛を使ってそれを完成させるのである。顔そのものに対しては特に工夫をせず水で洗うだけ（洗わない場合もある）で済ませるのである。髪に関しては多くの労力をかけて装う。年配の女性の多くは、自分の美しさを表すために、髪を清潔な状態に保ち整えてあることは重要で、常に櫛を「苗ジュジュ」の後ろに挿しており、髪が乱れたらすぐに櫛を使って整えられるようにしている。都市部の女性の多くが毎日化粧をするように、施洞鎮の苗族女性は、毎日真剣に時間をかけ苗ジュジュを作り、またすぐにその亂れを修正できるようにしている。

施洞鎮では、「櫛をもらうのは女性の成人式」とも言われる。40年前まで、女の子は頭のてっぺんあたり半径5センチの円形部分にしか髪を保留することが許さなかった。年長者の間には「女の子は小さいころに髪を剃った方がいいよ」という観念が残されている。「女の子は嫁さんになるまではずっと『半分坊主頭』で、嫁入り前には母やお婆さんから櫛をもらって一人

キーワード：櫛、苗ジュジュ、化粧、社会功能

前の女としての人生を始める」という思い出を話す者もいる。施洞鎮女性は嫁入り前に単純に櫛を使って髪を梳くだけで、頭髪に挿さない。施洞鎮の女性にとって、櫛は母からもらった一つの重要なものなので、成熟した女性のシンボルともいえる。しかし近年、櫛と現地社会の女性との関係は変容をみせ始めている。45歳以下の女性は櫛をだんだん付けなくなり、櫛の代わりに花などを「苗ジュジュ」につけるようになった。少なくとも45歳以上の女性専用頭飾りとなり、年配女性の象徴へと変化する傾向が見られるようになっている。

現在施洞鎮で一番多く見られる櫛は、黄色の小櫛で、銀色の糸と連結しているものである。毎日髪とカツラに白油を塗布し、梳かし、髪とカツラを連結して「苗ジュジュ」を作る。最後には櫛に付いた銀色の糸を髪に絞めて、櫛を頭の後ろに挿す。普段でもハレの日でも、例外なく櫛を使い「苗ジュジュ」をしてから、一日が始まる。「一日の始まりは『梳頭』^{スニト} 1だ」と調査地の女性達は語る。

本稿では、2015年から2018年にかけて施洞鎮において計5回実施した短期調査で収集した事例を用いて、櫛を切り口として、櫛に関する装飾行為を考察し、便宜的に「櫛を刺す世代」、「花を挿す世代」「苗ジュジュを作らない傾向にある世代」に分けて議論を進めていく。従来の物質文化研究に踏まえて、人間とモノの関係を「主体／客体」の図式を越えたものとしてとらえ、「櫛」が現地社会にもたらす社会的意義とその変容を文化人類学的に再考することを試みる。

注：

1. 現地で聞き取り調査を行う際、苗族女性は髪をとかして、「苗ジュジュ」を作ることを「梳頭」と称する。